

Title	異形のテキスト - 英国romantic novel研究(Abstract_要旨)
Author(s)	横山, 茂雄
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1998-05-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/182217
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

氏 名 横 山 茂 雄
 学位(専攻分野) 博 士 (文 学)
 学位記番号 論 文 博 第 345 号
 学位授与の日付 平 成 10 年 11 月 24 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
 学位論文題目 異形のテキスト — 英国romantic novel研究 —

(主査)
 論文調査委員 助教授 佐々木 徹 教授 喜志哲雄 助教授 若島 正

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、William Godwinの *Caleb Williams* (1794) 及び *St. Leon* (1799), Mary Shelleyの *Frankenstein* (1818), James Hoggの *The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner* (1824), Emily Brontëの *Wuthering Heights* (1847), Charlotte Brontëの *Villette* (1853) という18世紀末期から19世紀中葉にかけて刊行された6篇の作品を、romantic novelという観点から論じたものである。

第1章では、18世紀中期以降、英国で起こったromance, novel, Gothic novelをめぐる議論の歴史を辿りつつ、romantic novelの定義をおこなった。

Horace Walpoleの *The Castle of Otranto* (1764) は、Gothic novelというジャンルの誕生を告げた作品であるが、単にそればかりでなく、18世紀後半以降の英国のnovelの発展全体にとっても大きな意味を有していた。その第二版序文(1765)に明らかのように、*The Castle of Otranto* はきわめて意識的な試みであり、Walpoleが目論んだのは、‘the two kinds of romance, the ancient and modern’の融合であった。同時代のnovelが日常生活に密着するあまり想像力を失っていると考えたWalpoleは、往古のromanceにおける超自然性は保持しつつ、そのなかに現実に即した自然な振舞を行う登場人物たちを投入することで、新たな種類の物語形式を創造しようとしたのである。それは、超自然性の導入によって、novelを革新しようとする実験であったともいえる。

こうしたWalpoleの試みの背景には、18世紀中期におけるromanceとnovelをめぐる議論が存在している。散文物語の形式としてnovelが勢いを増しつつあったこの時期、romanceはそれとは対照的に非現実的で荒唐無稽なものとして排撃された。たとえば、Samuel Johnsonは、romanceの過剰な想像力を弾劾するのである。しかし、そのいっぽうで、John Hawkes worthのように、romanceにおける超自然的要素を擁護し、それと較べると、新しく生まれたnovelは狭い範囲の現実に囚われているのだという声を上げる人々もいた。*The Castle of Otranto* という作品は、作者の意図が実現されたかどうかは措くとしても、このような議論の中から出現したのである。

しかし、超自然性の導入の是非については、Walpoleの模倣を試みた初期の作家たちの間でも既に意見が分かっていた。*The Castle of Otranto* における超自然的要素は、‘Sir Bertrand’ (1773) を執筆したAikin姉弟によって称揚されたが、他方、*The Old English Baron* (1777) の作者Clara Reeveは、それを過剰で蓋然性の法則から逸脱するものとみなしたのである。Reeveが物語作者たるもの蓋然性の法則を遵守すべきであるというHenry Fieldingの見解を踏まえているのは明らかで、換言すれば、romanceとnovelの融合を目指したはずのGothic novelにあっても、基本的にはnovelの規範を守って、romanceの要素の導入は極力抑えるべきだというのが彼女の主張であった。Gothic novelというジャンルはやがて隆盛を極めることになるが、このようなWalpoleの本来の狙いとは対立するReeveの見解が与えた大きな影響は、Ann Radcliffeの作品に看取することができる。

RadcliffeがGothic novelの作家のなかでもとりわけ人気を博した理由のひとつは、疑いなく、彼女が‘the explained

supernatural'の技法を用いたことであつた。romanceを謳う彼女の作品には、確かに幽霊など超自然的存在が登場するが、しかしながら、物語の最後に至って、すべてに合理的な説明が与えられるのである。批評家たちの多くは、蓋然性の法則、理性の勝利を保証するもの、novelの規範を遵守するものとして、この手法を歓迎したのである。

novelにおける超自然件の導入の是非をめぐる議論とは、つまるところ、散文形式の物語における理性と想像力、リアリズムと非リアリズムをめぐる議論であつた。*The Progress of Ramance* (1785)で、Clara Reeveがnovelに'a picture of real life and manners'という定義を与え、いっぽうでromanceを'what has never happened nor is likely to'を描くものと想定するとき、novelとは理性の支配する現実に即した世界であり、romanceあるいはGothic novelとは想像力が支配する現実離れした世界であるという対立項が意識されている。

Walpoleは奇跡や亡霊などの超自然的要素を散文物語のなかに回復せんと願ったわけだが、しかし、その企ては彼が想像した以上に大きな可能性を孕んでいた。すなわち、'a picture of real life and manners'たるnovelの規範を逸脱する要素の導入を通して、従来のnovelでは描くことのできなかつたテーマを追求しようとする野心的な実験が、やがて一部の作家たちによって試みられるようになったのである。1810年代に、Walter Scottは、このような試みを指してromantic novelあるいはromantic fictionと呼んでいる。Scottは、これらの作品は'new trains and channels of thought'を切り拓き、それまでには不可能であつたかたちで'the powers and workings of the human mind'を描き出そうとするものだと論じた。

以上のようなromance, novel, Gothic novelをめぐる議論の歴史を踏まえ、本論では、novelにromanceを融合させることによって、novelの領域を拡大し、そのさらなる可能性を探求しようとした試みを、Scottの言葉を借りて、romantic novelと定義する。

第2章は、romantic novelの最も初期に属する作品である*Caleb Williams* (1794)及び*St. Leon* (1799)を扱う。William Godwinの*Caleb Williams*は、Radcliffeの*The Mysteries of Udolpho*と同年に刊行されており、したがって、この作品はGothic novelのいわば最盛期に登場したといえよう。'a picture of real life and manners'という尺度をもってすれば、*Caleb Williams*はRadcliffeの作品に較べてnovelの規範に適合しているわけだが、いっぽうで、Godwinはnovelという形式の可能性を探求しようとする点において遙かに意識的であつた。迫害される被支配階級の若者を主人公に据えた物語を書くことでGodwinが第一に目指したのは、*Political Justice*において表明した自己の政治思想を、novelのかたちを借りて広範な読者層に伝えようとする点であつた。novelを思想宣布の道具として利用した点において、*Caleb Williams*は明らかに先駆的な位置を占めている。

しかし、さらに重要なのは、この作品において、Godwinが、支配、被支配の關係に潜む人間心理の深淵、そして、知識への欲望の孕む暗い側面というテーマを描くのに成功したことである。この点でも、*Caleb Williams*はnovelの領域を見事に拡張してみせたのである。

こういったテーマをさらに大規模なかたちで探求すべく構想されたのが、錬金術師を主人公とする*St. Leon*に他ならない。そして、テーマの要請するところから従って、Godwinは超自然的要素を大胆に導入し、それに合理的説明を与えない。その結果、*Caleb Williams*とは異なり、*St. Leon*はnovelの規範を大きく逸脱することになっているが、しかし、両者は、novelの可能性を拡大、追及しようとする努力においては共通しているのである。*St. Leon*の最も野心的な点は、主人公*St. Leon*を、虚偽の知識に魅入られて破滅する存在として描きつつも、同時に、人間精神の崇高さを示す存在として提出しようとしたことである。そして、この試みのゆえに、テキストは分裂したかたちで我々の前に曝されることになる。すなわち、*St. Leon*は、誤った知識のもつ危険性に警鐘を発する教訓譚と、知の崇高なる探求を描く物語の間を揺れ動き、いずれかに統合されることはないのである。

第3章は、Godwinの娘Mary Shelleyが、*Frankenstein* (1818)において、知識の有する両義性、そして、知識の探求に憑かれた人物の辿る崇高にして悲惨な運命というテーマを如何に引き続いていったかを明らかにする。

従来の*Frankenstein*の論者は*St. Leon*の及ぼした影響にほとんど注目していないが、知識の探求をめぐる物語という観点から眺めるとき、両者の類似は否定すべくもない。Mary Shelleyの作品においても、こういったテーマは、novelの規範を破って、'what has never happened nor is likely to'を描くことを要求している——主人公*Frankenstein*は、ここでは錬金術ではなく生命の創造に取り憑かれるのである。そして、*St. Leon*と同じように、*Frankenstein*もまた崇高にして悲惨

な存在として描き出されるのだが、そのためにテキストは曖昧で重層的なものとなっていく。Frankensteinの創り出したものが異形の怪物であったのは、その意味で象徴的であったといえよう。

Mary ShelleyがFrankensteinを発表した1818年とは、‘a picture of real life and manners’ というnovelの規範が決定的なものとなりつつある時期であった。Gothic novelというジャンルがほぼ終焉を迎えるいっぽうで、たとえば、Jane AustenのPride and Prejudice (1813) やEmma (1816) といったリアリズムに則りromanceの要素を徹底的に排除したnovelの傑作が既に出現していたのである。とはいえ、これはromantic novelの消散を意味しているわけではない。novelの固定した規範に抵抗しようとする作品は依然として存在した。そのなかでも、過激な実験性において突出しているのが、第4章で論じるJames HoggのThe Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner (1824) である。

The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinnerは、Robertという狂信者の手記、及び、その「编者」の叙述というふたつの語りから成り立っているが、両者は互いに矛盾しあい、読者は首尾一貫した事件像、「事実」には決して辿り着けない。Robertによれば悪魔、「编者」によればRobertの妄想の産物とされるGil-Martinの正体もまた、曖昧なまま宙吊りにされ、作品全体は超自然譚と狂信の心理を挟む物語の間に分裂している。こういったテキストの分裂した形態は、分身というテーマと照応しているわけだが、RobertとGil-Martinとの明白な分身関係の背後には、さらにRobertの兄Georgeが絡む三者間の複雑な分身の構図が潜んでいる。そればかりか、Robertが二者に分裂しているのか三者に分裂しているのかを決する手掛かりも存在しない。novelの規範を根底から覆してしまうような決定的解釈の不可能性こそHoggの作品の本質を成すものであり、その異形のテキストは、我々に今なお衝撃を与えてやまない。

Emily Brontëとその姉Charlotte Brontëが処女作を出版した1840年代後半には、novelが劇や詩を押しつけて主たる文学形式となったという認識が英国においてほぼ立されていたが、こういった時期にあっても、彼女たちはリアリズムに則る本流のnovelに抵抗を試みていた。第5章及び第6章は、それぞれ、Emily BrontëのWuthering Heights (1847)、Charlotte BrontëのVillette (1853) を論ずる。

Wuthering Heightsにおいて、我々は、novelの規範から逸脱する「夢の物語」が「自然な物語」のなかに導入されているのを見出すことができる。一部の論者のように、「夢の物語」を無視して、Wuthering Heightsをリアリズムに則ったnovelと断定することは、その本質を見誤るものであろう。それは、まさに非リアリズムの語り、「夢の物語」を利用することで、複雑な主題を展開させ、novelの領域を広げること成功している。Wuthering Heightsのテキストも内部に幾多の矛盾を孕み、覆い難い亀裂が生じているが、ただし、その分裂のありかたはThe Private Memoirs and Confession of a Justified Sinnerのふたつの叙述の場合とは異なっている。「夢の物語」と「自然な物語」が対立して齟齬をきたすのではない——主人公のCatherineとHeathcliffが苛まれる分裂した欲望から、「夢の物語」の孕む矛盾も「自然な物語」の孕む矛盾も共に生じているのであって、我々は両者を重ね合わせることができるのである。

僅か一作の長編を遺してこの世を去った妹Emilyとは異なり、Charlotte Brontëは、その作家活動の最後に示るまで、同時代のnovelの定義と格闘せざるをえなかった。CharlotteはJane Eyre (1847) において非リアリズムの要素をリアリズムの語りのなかに大きな破綻なく取り込むことに成功したのだが、同時に、Jane Eyreがnovelの規範から逸脱していることを他から指摘され、また、自らも意識せざるをえなかったのである。想像力の支配するromanceの世界を導入しようとする欲望とそれを排除しようとする欲望の分裂は、結局、彼女の生涯の最後にVilletteという作品を産み出すことになる。

想像力と理性の葛藤に苦しむVilletteの主人公LucyとはCharlotteの自画像に他ならず、しかも、この葛藤はテキストの形態そのものにも影響を及ぼしている。Villetteという作品にあっては、非リアリズムの語りリアリズムの語りをしばしば侵食するが、両者は融合することなく、乖離したままであり、novelとromanceの間に分裂した異形のテキストを現出せしめている。その異形性こそ作品の核心を成しているのであって、その意味で、Villetteは、romantic novelのひとつの極限を示すものといえよう。

以上に見てきたように英国のromantic novelは、novelの領域を拡張あるいは逸脱しようとしたその試みのゆえに、分裂した異形のテキスト群を産み出したのである。

論文審査の結果の要旨

18世紀英国の文壇ではノヴェルとロマンスの対立をめぐる議論が盛んに行われた。ノヴェル、すなわち、近代小説は中世のロマンスに対抗するものとして発生した。その基本的な姿勢は異国趣味や超自然的な要素を排し、日常性・蓋然性を重視するリアリズムを導入しようとするものであった。世紀半ばにリチャードソンが『クラリッサ』を、フィールドینگが『トム・ジョーンズ』を発表したことで、散文物語の形式としてノヴェルが大きな力を持ち始めるが、この流れに抵抗して1764年ウォルポールは『オトラントの城』を世に問うた。これがいわゆるゴシック小説の嚆矢であり、明らかにこの作品は現実社会の風俗を忠実に写すだけのノヴェルに対する不満から生じたものであった。ノヴェルとロマンスの対立は、換言すれば、理性と想像力との対立でもあったのだが、前者に於いては想像力が十分に発揮できないと考えたウォルポールは、人物の行動には蓋然性を持たせつつ、物語中の出来事に超自然性を与えることにより、ノヴェルとロマンスの融合を試みたのである。この『オトラント』以後、想像力を文学の核心に据えたロマン主義時代、すなわち18世紀後半から19世紀前半にかけて、ノヴェルの領域を拡張し、その規範から逸脱しようとする小説がいくつか発表されることになる。それらを横山氏は *romantic novel* と呼び、本論に於いて『ケイレブ・ウィリアムズ』から『ヴィレット』までの一連の小説を取り上げて考察する。これらの小説はその野心的な試みの故に結果として統一感を欠き、曖昧性を孕むことになるのだが、氏はこれらの「異形」のテキストを、安易な一般論に還元することなしに、丹念に、且つ鋭利に分析して興味深い成果をあげている。

急進的思想家として名高いゴドウィンWilliam Godwinの小説『ケイレブ・ウィリアムズ』(1794年)では、ウィリアムズは自分の主人である治安判事のフォークナーが実は殺人犯である、という事実を知る。主人公がこの知識を得たことにより支配者と被支配者の力関係が逆転するが、この時基本的には善意の人物であるウィリアムズが知識、すなわち、力を獲得するにあたって微妙な快樂を得ると示唆することで、ゴドウィンは知識への渴望に見られる暗い側面を描こうとしたと横山氏は述べ、同じ意図が超自然の要素を取り入れた次作の『サン・レオン』(1799年)に於いて継承、発展されているとする。確かに、いかなる犠牲もいとわず錬金の秘法を追求し続ける主人公の究極の目標は世俗的な富ではなく、魔術によって与えられる超人的な力そのものであり、彼の破滅を通じてゴドウィンは知と力に伴う危険を訴えている。論者はさらに続けて、この小説が主人公を否定的に描き出すと同時に、知の探求を続けてやまない人間精神の崇高性を称揚する二つの方向に分裂している、とした上で、これが彼の娘であるメアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』(1818年)に大きな影響を与えたことを示す。つまり、主人公フランケンシュタイン博士が生命の創造に取り憑かれているのは、騎士サン・レオンの錬金術に対する妄執と軌を一にするものであり、この小説に於いても知識の探求の持つ危険と崇高性が同時に描き出されているのである。これまであまり論じられることのなかった『サン・レオン』をはさんで、横山氏は『ケイレブ・ウィリアムズ』と『フランケンシュタイン』という二つのテキストの関係に新しい光を当てることに成功している。

ホッグの『義認された罪人の回想と告白』(1824年)は罪人の手記、及びその編者の叙述という二重の構成をとっているが、その二つの記述の間には重大な点でいくつかの矛盾があり、読者はそれらの背後にあるはずの絶対的な真実にたどり着くことを許されない。主人公にまわりつくドッペルゲンガーの存在もそれが超自然的な存在なのか、あるいは彼の妄想の産物、という合理的な説明がつくものなのか、明確な答えは得られない。1820年代に入るとゴシック小説も下火になり、リアリズムに則ったノヴェルの勢力が圧倒的になっていたのだが、このように曖昧性に満ち、単一的な解釈の不可能性を大胆な形で提示した『義認された罪人』を、ノヴェルの固定化した規範を根底から覆そうとした試みととらえる論者の見方は納得できるものである。

エミリー・ブロンテの『嵐が丘』(1847年)もここで取り上げられる他の小説同様に分裂し矛盾を孕むテキストであるが、その分裂の根本に横山氏は主人公のキャサリンとヒースクリフが持つ欲望の胚胎する矛盾がある、と考える。激しく惹かれあう主人公たちは幼い頃二人で共用していた箱寝台を失われた樂園として希求するが、彼等は同時にこの欲望を退けねばならない。この分裂が生じるのは、しばしば持ち出される近親相姦のタブーとは関係なく、二人が生殖・再生産のシステムに参入することを拒むからだと氏は結論する。この議論自体はいささか強引であるように思われるが、その点を除けば、氏の『嵐が丘』論は綿密な読みに基づいた鋭いテキストの分析から成り、それは、例えば、内部(箱寝台)と外部(ヒースクリフとの遊び場であった荒野)の対立に象徴されるキャサリンの願望の分裂と、それに呼応するヒースクリフの欲望の分裂が

テキスト内でイメージや比喩表現によって如何に連結されているかを鮮やかに解き明かしている。

想像力の支配するロマンスに強く惹かれる傾向があったシャーロット・ブロンテの作家活動は、ますます支配的になるノヴェルのリアリズムとの葛藤の歴史であった。横山氏によれば、そのせめぎ合いは作者が生前最後に発表した『ヴィレット』(1853年)に於いてもっとも明瞭な形で現出する。想像力と理性の相克に苦しむ主人公ルーシー・スノーは作者の自画像に他ならず、表面的にはリアリズム路線に乗りながら、亡霊や阿片夢といった非リアリズム的要素が奇妙に混入するこの小説はromantic novelの一つの極限を示すものだとする氏の見解には説得力がある。ただ、同じ作者の『ジェイン・エア』に於いては同様の葛藤が調和のとれた形で現れている、とする氏の叙述に今ひとつ具体性がないのは惜しまれる点である。

いわゆるromantic novelが様々に分裂するベクトルを内包し、横山氏の言う「異形のテキスト」を提示する、というテーゼ自体は独創的なものではない。しかし、本論の眼目はこれらの一群の小説に関する一般論にあるのではなく、その長所は取り上げられた個々の作品に対する読みの深さにある。特に『嵐が丘』論は出色のものであった。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。1998年4月21日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。